寄　稿

自然素材が紡ぐ歴史と文化
～各地の「練塀」にみる伝統技法継承の重要性～

京都美術工芸大学
建築学部建築学科 教授　井上　年和

当然のことと言われるかもしれませんが、古来から建築は自然素材で造られています。石材、木材、草、藁、竹、土、木の皮、蔓などを適材適所に用い、基礎、軸部、屋根、壁などの各部位を構成して居住性や構造性能、耐久性、意匠性を高めてきました。

また、地元の素材で構成された建築は、各地域特有の景観形成にも寄与してきました。

しかし、日本では高度経済成長期以来、経済性、利便性が追及されるようになり、これらの自然素材や伝統技法を活かした建築は数を減らし続け、各地域の個性が消えつつあります。

地域の個性と言えば、表通りに面した塀の存在は、まちなみの景観構成に大きな影響を与えています。

山口県萩や高知県安芸の廓中、吉良川町など重要伝統的建造物群保存地区に選定されているまちなみは、屋敷を取り囲む塀の存在が際立っています。特に吉良川の石塀は「いしぐろ」と言う名称が付くほど、地域の象徴的な存在となっています。

長崎市では近隣地で採取される石と「天川土」と称される安山岩風化土に石灰を加え、水で練り硬化させたものを用いた塀が寺町周辺に多く見られます。

山口県祝島にも同様のものがみられ、日本遺産「石の島」として知られる瀬戸内海の小豆島や近くの豊島の石塀、瓦塀、徳島市の大神子海岸で採れる「おとめ石」や和歌山では「紀州青石」を用いた塀なども地域の素材を用いた塀がまちなみの個性を引き立てています。

博多では戦国時代に戦火で焼けてしまった町を豊臣秀吉が復興する際に、焼け残った石や瓦を塗りこめた「博多塀」が残り、堺でも慶長20年（1615）の大坂夏の陣で戦乱によりに灰燼に帰した後、焼けた瓦を用いて屋敷地や社寺の周りに塀を構築したものが残っており、いずれも廃材を利用しながら復興を果たした時の象徴として存在意義があります。

図１　山口県萩のまちなみ

図２　高知県安芸廓中の瓦塀

奈良や京都では寺社の境内でも、塀は厳粛な空間を生み出していますが、これは「日干し煉瓦」といって、粘土と藁を混ぜてブロック状に成型したものを乾かして固めたものと瓦を交互に積み重ねたものが多く、良質の粘土が豊富に取れる関西独自の構法で瓦の高さ間隔が少し広く、鬼瓦や軒瓦などを埋め込み意匠性が高いものも見られるのが特徴となっています。

沖縄のやちむん通りなどでも「クチャ」という土を使い低温で焼き上げた赤瓦が、まちなみを特徴付けています。

また、日本三大土塀である熱田神宮の「信長塀」は、永禄３年（1560）に桶狭間の戦いで勝利したお礼として織田信長が奉納したもので、瓦と練り土を一定の厚みで積み重ね